

---

# くだらない物語

如月綺華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くだらない物語

### 【Nコード】

N4498A

### 【作者名】

如月綺華

### 【あらすじ】

ある路地裏にひっそりとたたずむバー、別れたばかりの男にバーテンダーがある話を聞かせる。

## プロローグ

カラン・・・

ちよつとした手の動きに反応した琥珀色のバーボンの内を泳ぐきらきらと光る氷とそれを包むガラスとがぶつかり合い、透き通った音を響かせた。

僕の隣の席には、さっきまでいた君のぬくもりがまだ残っている。

ついに僕は一人。

そう、また、・・・独り。

僕はこれから君なしの生活を始めよう。

ただ、戻るだけだ。君と出逢う以前の日々へと。

だけど、なんでだろう。今、僕は、君との思い出ばかりが頭をよぎる。

君の存在さえ知らなかったあの頃が、なんだか、とつても味気なく、奇妙な喜劇のようにしか感じない僕がいる。

僕はこれからどうやって生きていったらいいのかな。

今はそうしか思えない。

だけど、きっと僕は色を取り戻すだろう。

君という惑星をなくした地球（僕）を照らしてくれる新しい月が現れる、それまでの辛抱だから・・・。

## 第一話

・・・カラン

ヨーロッパのある国のある街中の路地裏に店を構えるある小さなバー。

男は彼女が店を立ち去ったその後もバーカウンターに肘をつき、席を立つ様子も見せなかった。

男の視線は一見カウンターの奥にある店内の薄暗い灯りをうけほのかに輝いている数々のグラスに注がれているかのようだが、その瞳には何も映ってはいなかった。

「お客さん、まだ何かお飲みになられますか？」

バーテンダーはどこか遠くを見つめながら、グラスを口へと運ぶ男に話しかけた。

「同じのを」

彼は上の空のまま、気の抜けた声でそう答えた。

「はい、承知いたしました」

バーテンダーはそんな男の態度を特に気にしなかった様子もなく、後ろの棚から新しいグラスを取り出すと、器用に液体を注いだ。

「どござ」

そう言っつてバーテンはカウンターの上に作りたてのバーボンを置き、融けかけた氷だけになったグラスを下げた。

男は何を思いたったのか、今まで何もみていなかった瞳を向け、まるで違う世界の出来事を眺めるかのようにそのバーテンダーの動作を追った。

しばらく、何か考えていたようだったが、ふと口を開いた。

「この世の理りでは俺もこのグラスも一緒なんだなあ。味わう部分がなくなれば、もう用無しだ」

それはバーテンに話すというよりはまるで、一人、思い出を思い出す時のひっそりとした消えそうな独り言みたいだった。

「さっきの彼女さんのことですか？」

バーテンダーは下げたグラスを洗う自分の手をみつめながら言った。

「ああ」

男はほんの微かに頷く。そして、目を伏せ先程よりもさらに小さい声で続けた。

「長いようで・・・短い愛、だった」

そして、何かを振り払うように首を横に振った。

「そうですね」

バーテンは客に目も向けず、相槌をうつ。

「うつわ、さぶっ」

「ちよつとー、雪降ってるよお。最悪う」

店を出ようとした若い二人組みが開いたドアの向こうを見、口々に文句を叫んだ。

「雪、ですか……」

バーテンダーがドアの長方形から覗く外の白い景色を見て呟いた。「雪と言えば……こんな話がございまして……ほんのくだらない話ですが」

彼はいったん手元のグラスに視線を落とすと、顔を上げ、男の目をしっかりと見据え淡々とした口調で語り始めた。

「ちよつとこんな感じのバーで、あなたと同じように恋人と別れたばかりの男がぼーっと考えこんでいましたね。名前は……ジャックといいました……」

## 第二話

「はあ」

ジャックはため息をついた。

なんでこうも続かないんだ。

どんなに好きだった女性でも自分のモノになったとたん今までの熱が急に冷めてしまう……。

そして彼女は、冷たい、やさしさが無い、愛が足りないと不満をぶちまけ、最後には、いつもこの店で二人の苦しい時間が終わる。

いつもその繰り返し。。。

もう一度大きくため息を吐く。このバーの名物、ステージのグランドピアノにあわせて歌う歌姫の歌が、今ちょうど失恋ソングだ。僕の気持ちにぴったりのバラード調の調べで今にも涙がでそうになる。

もちろん失恋のためではない。

薄情な僕の恋心の所為だ。

「また今度もふっちゃったの？色男さん」

突然、後ろからからかうような調子の声が聞こえ、ジャックは振り向いた。

そこにはさつきまでステージで歌っていた歌姫が立っていた。

いつの間にか演奏は終わっていたのだ。

「いつも、いつもこの店に女の人と来るたび女の子のほうは泣いて帰っちゃうのよね」

ジャックの隣のカウンター席に座りながら、歌姫はその端麗な顔に少しばかりのからかいの表情を浮かべて言う。

なんだこの人は……？

この歌姫の第一印象はジャックにとって最悪まではいかないものの、良いものではなかった。

「なんでそんなこと・・・」

「なんで知ってるかって？」

ジャックの言葉を遮り、ローズがすまし顔で言った。

「そりゃああんだけの数泣かして帰しゃあ嫌でも覚えちゃうって」

いつのまにか注文していたトロピカルジュースをストローから飲みながら、彼女はいけしゃあしゃあと言う。

「俺ってひどい奴ってコトか？」

ジャックは無表情で彼女の方は見ず、前をむいたまま言った。

「まあね」

彼女も相変わらずの澄ました顔で肯定する。

「だったら・・・」なんで俺に話かけるんだ・・・。

と言おうとしたときふいにローズがカウンターの向こうを見つめたままぼそとこぼした。

「でも、人間なんかそんなものじゃない？」

ジャックは驚いてローズをみた。

「人間の心なんて思いどろりになんかいかない。悲しい時は涙がでてきちやうし、良いことが起きればどうしたって嬉しいもの」

それに、と彼女は付け足す。

「どんなに悪い奴だって解ってたって好きなものは好きでどうあがいたって嫌いにはなれないもの」

そう言った彼女の瞳はどこか遠くを見ているように感じた。けどジャックはそんな彼女の一言に救われたような気がしていたのだ。

しばらく二人は何も話さずにただ座っていた。

「帰るの？」

ジャックが席を立つとローズは口を開いた。

「ああ」

ジャックはそう返事をすると出口へと向かう。

「ジャック」

しかし、途中、彼は背後から呼び止められた。

振り向くと、ローズは何もしてないかのように、ジャックの席を立ったときと同じにカウンターに前を向いて座ったままだ。

だが、また、彼女の声がジャックまで届いた。

「また、来なよ」

そして今度はこちらに背を向けながら手を持ち上げるとひらひらと軽やかに振った。

ジャックの返事は聞こえたかわからない。それくらい彼の声はとても小さかった。

ジャックはバーのドアを開けた。

外は深々と粉雪が舞い降りていた。

彼はとても不思議な気分だった。

最後に見た彼女の後ろ姿が目蓋の裏側にちらついている。

『また、来なよ』

この言葉がジャックの心の奥をあっためていた。  
なぜかは、わからない。

だけど、彼女の言葉を借りれば、

”嬉しいものは、嬉しい”んだ。

この寒い雪の日の出来事が、ジャックとローズの出逢いだった。

### 第三話

「はい、お土産」

ジャックはローズに生のままの林檎を手渡した。そのへたには、ピンクのリボンが不器用に結び付けてある。

「あら、色気のないプレゼントありがとう」

ローズは皮肉混じりにそう言うのと林檎をうけとり、何を思ったのかそのままかじった。

「あ、でもおいしい」

意外だったようでもわず口に手をあてている。

「だろ？花束なんかよりローズにはこっちのが似合うかとおもって「なんですって?!」

ローズはきつとこちらを睨むとジャックのほっぺをむにいと引っ張った。

「痛いって。わかった、わかったから。俺が悪かったって」

それで手は放したものの拗ねた顔をしてこちらをみている。

「あ、ほら、キミの出番が始まるよ」

ジャックはあわてて言うのとステージの方へとローズの背を押しやる。

しかたなしにローズはしぶしぶとステージへと歩いていった。

あの日からもう3年が経っていた。

そう、二人が出逢ったあの日から。

近ごろはジャックもローズと先程のような馴れ合いをして、冗談を言い合う仲にまでなった。

そして…

ジャックはローズにひかれてはじめていたのだった。

ローズがスポットライトを浴びたステージにあがった。

ステージの上では先程の子供のような拗ねた表情はない。

りっぱな威厳をたたえたその端麗な顔立ちとその歌はここにいるすべての人を魅了するものだった。

男も女も関係なく、彼女の歌声に酔い痴れる…。

そしてそれはジャックも例外ではなかった。

出番が終わり拍手喝采と共にステージをおりたローズに何人かの男が何か話かける。

それを笑顔でふりきって彼女はジャックのところへやってきた。

「今日、用事ある？」

戻ってきたローズがジャックにいきなり尋ねた。

「いや、暇だけどなんで？」

ジャックは軽い口調で以て答える。

「なんでって、本来ならこういうのを誘うのはレディーじゃなくて男の方でしょうが」

「え？」

ジャックはグラスを持ったままさつと振り向いたので、中身がこぼれそうな程ゆれた。

「だあからあ、食事にいこうって言うてるの。二人で」

二人の間に沈黙が漂う。

彼女が、誘ってくれてる…？

これは、彼女も同じ気持ちなのか？それとも、ただの自惚れか？

周りがジャックをじろりと睨む。

「俺でいいのか？あんたに言い寄る男は五万といるだろ？」

その視線を感じ、うれしさとは裏腹にこう言ってしまった。

とたんにローズの顔色が変わっていく。

「ジャックはあたしが他の人と仲良くお食事についてもいいってわけね」

ジャックの言葉はローズの静な怒りを招いたようだ。

「なにいつて…」

そんなわけないだろう…！

完全否定しようとして躊躇ったジャックがいた。

ここでうまくいっても、また…。

そんな思いが頭をよぎった。

\* \* \*

「彼は恐かったんです……ここで彼女との関係を壊すことが……付き合った後、彼は前の恋人達のようになることが恐かった」

バーテンはそう言うのと洗い終わったグラスを棚にもどした。

「それで……どうしたんだ？そのジャックは」

男はいつの間にかバーテンダーの話に引き込まれていた。

「それはですね……彼は臆病で、彼女との別れがいやで、心にもないことを言ってしまったんですよ」

\* \* \*

「いや、平気かっていわれても……俺がなんでローズのそんなことまで気にしなきゃいけないんだよ」

言ってしまった……。

後悔してももう遅い。ジャックは恐る恐る彼女の方を見た。

「そう　　そうよねっ。ゴメンね、変なこといつちやって」

えっ…？

怒るかとおもっていたジャックは驚いた。

ローズは今までに見たことも無いくらい悲しそうに見えた。

「じゃあ、いいや。ご飯は他の人といく…」

じゃあ、バイバイと手を振ってジャックの元を後にする…。

これでいいんだ……

ジャックはそう自分に言い聞かせた。

これからは友達として、この想いをひた隠しての偽りの関係でもいい……。

だからこの女性を失いたくないんだ。

今までの関係が続けていけば二度と会えなくてはならない。

ジャックはそう信じていた。

違う。信じたかったのだ。

だが、彼が自分で思い込もうとする度に余計に胸が詰まる思いが彼を苦しめた。

そんな根拠はどこにもない。

心ではそうわかっていたのだから…。

あれから数日経った。

ジャックはやはりこないだのことを謝ろつとバーへとやってきた。

ローズのことを探しながらいつものカウンターの席に着く。

ローズはまだ来てないようだった。ジャックはいつもの注文して、ローズが現れるのを待っていた。

その時、後ろから聞き慣れた足音が聞こえた。

ローズだ…。

「こないだは…ゴメン」

ジャックは隣に座ったローズに静かに言った。

「えっ？何が？」

ところが、ローズは何のことか解らないとでもいうように首をかしげた。

ジャックはローズのその反応に動揺した。

…何が？つて…

「こないだ食事誘ってくれたのにさ、ひどいこと言っただろ？」

ああ、つとローズは合点いったように頷く。

「そんなことまだ気にしてたの？」

くすつと笑うローズはいつものローズだった。

「だから、あたしが来たときなんかよそよそしかったんだあ」

「悪かったな」

ジャックはほつとした反面むつぷりとして答える。

「なあんだ。あたしの話がばれちゃったのかと思った」

あたしの話……？なんだそれ。

「あたし結婚きましたんだ」

## 第四話

……カラン

これでいい…。

これでいいんだ……。

ジャックはそうなんども自分に言い聞かせた。

『親が決めた相手なんだけどね…』

そう言った君は嬉しそうでも、悲しそうでもなかった……。

まるで魂のぬけたただの”ローズ”という脱け殻のようだった。

『婚約がいやで家をとびだしてきて、ここで働いて、今まで一切連絡もとらなかつただけだ…父がね、危篤状態なんだって』

それで、と彼女はいつもの光輝く目とは違う冷たい目で話を進めた。

『父は…あたしに最後の願いとして結婚して家を継いでほしいって。父は軍人、母は貴族出だから家っていうのがほんとに大切なんだって…初めて父の涙を見たわ』

……カラン

しょうがないさ……。

死にそんな親の願いを無視できるほど彼女は冷たくはなれないのだから。

『ほら、今まで親不孝ばかりしてきたからさ、最後の願いくらいは……ねっ』

そして、浮かんできた君の最後の言葉と一緒にバーボンをいつきに飲み干した。

『だから、今日でおわかれなんだ』

明日か……。

『なんでまた、そんな急なんだ??』

『前からずつと言われてたんだけど、やっとこないだ決心ができたから』

こないだ……??

こないだって　もしかして、俺を食事に誘った日か??

あのさびしそうな顔が脳裏に蘇る……鮮明に。  
僕は彼女の最初で最後の賭けに負けてしまったんだ……。  
なんで、こんなに胸が痛いんだろう？  
なんで、心がこんな物足りなさを感じて叫ぶんだろう？  
今までと同じ……彼女がこの店を出て行って、  
俺がここでのこって酒を飲む。

いつもの、恋人との別れと同じ……。

だけど……いつもと違う。俺とローズは、恋人どうしじゃない。  
まだ、始まってもなかったんだ。

「お客さん　お客さん!!」

ジャックは誰かに揺さ振られ目を覚ました。

「う……ん……？」

どうやらそのまま店のカウンターで眠ってしまったらしかった。

「もう閉店時刻とくにすぎていますよ、ジャックさん。今日はローズがいなくなる日だろう?? 行ってやんなくていいのかい？」

店長はジャックに言った。

その言葉で寝起きと二日酔いでぼんやりしていた頭がはっきりとした。

そうだ……今日なんだ。

しかし、ジャックは行こうとはしなかった。

「俺、もう言ってることないから……」

「何言ってるんですか。ローズはあなたに逢いたがってますよ」  
にこりと笑うと店長はピンクの細長いものを取り出した。

それは、あの林檎に結び付けたリボンだった……。

ジャックがローズに渡した最初で最後のプレゼントの……。

「大切そうにしまっていましたよ。高級な指輪なんかを入れておく宝  
石箱の一番上に」

そして、店長はドアを指していった。

「いってあげなさい、ローズのために」

ジャックはそのピンクのリボンをもって店から走り出ていった。

ローズの元へ。

寒い日だった。

外にでると雪がちらちらと舞っていた。

ジャックは腕につけた時計を見た。

時計の針は九時三十分すぎを指していた。

汽車がでるのは午前十時だ。

ジャックは走った。

顔に冷たい雪があたるのも気にせずひたすら走った。

気持ちは消せないといったあなたが自分の気持ちを殺して去って  
しまふというのか。

俺をこのまま、惨めな男なまま置いていってしまうのか。

やっと駅についた。

汽車が出ようと汽笛をならす。

「ローズ　! !」

ジャックは出来る限りの大声で叫んだ。

「ジャック?!」

窓からローズが身をのりだしている。

「来てくれたんだ……」

とつぶやくローズにジャックは言った。

「行くな」

「えっ?」

「行かないでくれ、ローズ」

ローズは驚き、嬉しそうに頷きかけて、やめた。

「……ごめんなさい。私…あなたに引き止めてもらって嬉しい。

けど、両親をこのままになんてあたしにはできない……ゴメンね」

ジャックは手にもったりボンを手渡した。

「解ってた……君はそんなことできないって。だから　待ってる。

あのバーで何年でも、何十年でもいつまでも待ってるから」　その

時は、とジャックはローズの瞳をみて続ける。

「こんな林檎なんかよりも光る指輪をプレゼントするよ」

その言葉をきいたローズはクスリと笑うところだった。

「いいえ、あたしにぴったりなこんな林檎がいいわ」

汽車が動き出した。

「絶対戻ってくるから」

去りゆく汽車から手をふるローズの顔には涙と……いつもの笑顔があった。

そして、汽車は雪の中に消えていった。

## 最終話

「そして二人は別れました。再会を信じて  
しかし、とバーテンダーは続けた。」

「二人はそれから二度と逢うことはありませんでした」

「…二人とも、新しい恋を見つけたのか？」

男は、バーテンに尋ねる。

いいえ、とバーテンダーの男は首を振った。

「ジャックはその思い出のバーで待ち続けました。自ら従業員になり、そして、店長から店を譲ってもらい二代目の店長になって。

そして、何年も何十年もまった。…だが、ついに彼女は、ローズはこの店にあらわれることはなかった…」

この店、って。

男は繰り返すと混乱したようにいった。

「え、二人の思い出の店ってここ……？」

バーテンは男を指差すと笑いながら言った。

「ええ、このバーですよ。二人がいつも座った席はあなたが座っている、その席と右隣。あなたのほうにジャック、その右にローズです」

「なんで、あんたそんな詳しく…もしかして、あんたの名は…？」

おやおや、と言ったバーテンの瞳にははつきりと男の姿が写っていた。

「はい、ジャック・ホワイトと申します」

バーテンダーはにいつと笑うとまた洗ったグラスを拭き、かたづけた。

「あんたはまだ待つてるのか？」

男はバーテンダーに尋ねる。

「はい、いつまでも待つと約束しましたから」

バーテンダーはそう言って頬笑んだ。それを聞いた男はぼつり

と呟いた。

「俺にもいつかそんなに待ち続けることができるほど愛することができる人があらわれるのかな」

「はい、きっと」

バーテンダーは目を伏せておだやかな顔で答えた。

ここからは余談となるが、のちに男があこのバーを訪ねたところジャックというバーテンダーはいなくなっていた。

…いや、ジャック・ホワイトというバーテンは元々いなかった。

男が若いバーテンダーに尋ねたところ、今うちにはそんなバーテンダーはいないと言われた。…何年か前に他界している、と

そしてこれも後の調べで解ったことだが、ローズ・オルニティアは列車事故で若くに亡くなっていた。

彼女の故郷からこの街へとを結ぶ汽車での事故だったそうだ。

男は辺境の街の共同墓地にあるジャック・ホワイトの墓を探し出し、彼女の故郷からとって来たひとつの真つ赤な林檎を彼の墓前にそなえてやった……。

あのジャック・ホワイトというバーテンダーは未だに來ることができなかつた恋人、ローズを待ち続けているのだろうか、と思いいながら。

\* \* \*

「ジャック」

「ローズ……!!」

男が去ったのちジャックの墓の前で抱き合う男女の姿とその声を聞いた人がいたとか、いないとか。

そのとき、彼の置いていった林檎が二つに割れたそうだと二人が仲良く分け合ったかのように。まる

「ローズ、逢いたかった」

「ずっと待たせてごめんなさい。ジャック」

そんな囁き声が汽車に乗ろうとした男の耳には風となって届いたのだろうか。

彼は後ろを振り向いて来た道を見つめていた。

それからしばらくして、彼は汽車にのりこんだ。

そして、降り始めた粉雪が、墓地に残された男の足跡に降り積もっていった。

## 最終話（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。今度また他の作品でお会いできたら光栄です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4498a/>

---

くだらない物語

2011年1月28日01時26分発行